

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：27101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770010

研究課題名(和文) グノーシス的二元論を基軸とした現代フランス哲学の再理解

研究課題名(英文) Contemporary French Philosophy Reconsidered from the Perspective of Gnostic Dualism

研究代表者

伊原木 大祐 (IBARAGI, Daisuke)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：30511654

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古代グノーシス主義に見られる反宇宙的二元論(世界領域とそれに抗する領域とを想定する二元論)との比較を通じて、現代フランス現象学、とりわけE・レヴィナスとM・アンリの思考に潜む独特な二元論の特徴を検討した。さらには、これらの思考が20世紀のフランスにおける他の哲学思想(ペトルマン、ヴェイユ、パタイユなど)と連動していることを明らかにすることで、新たな思想史的考察への道を開くことができた。

研究成果の概要(英文)：This research project examined the implicit dualistic tendencies of contemporary French phenomenology, especially Emmanuel Levinas and Michel Henry, and compared their thoughts with the anti-cosmic dualism devised by ancient Gnostic thinkers. From this point of view, we succeeded in showing that the French phenomenological thoughts after what is called the "theological turn" can be linked to other French thoughts (S. Weil, G. Bataille, S. Petrement, etc.) in many respects.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：グノーシス 現象学 フランス哲学 二元論 宗教哲学

1. 研究開始当初の背景

近現代の哲学思想のうちにグノーシスのモチーフの反復や回帰を見いだすという考えは、すでに E・フェーゲリン(『政治の新科学』・『政治とグノーシス』)、J・タウベス(『西洋的終末論』・『礼拝から文化へ』)、P・コスロフスキー(『哲学史におけるグノーシスと神秘主義』)らの哲学史理解によって支持されてきたものである。このような理解の方向性に対して決定的な指針となっているのは、何と云っても、ハイデガーから出発してグノーシス主義の現代的意義を指摘した H・ヨナスの業績(『グノーシスと後期古代の精神』・『グノーシスの宗教』)であろう。しかし、以上に挙げた諸研究は、グノーシス主義の現代性をもっぱら「ドイツ哲学」との関係から捉えることに傾斜しており、同時代のフランス哲学思想がほとんど射程に入っていない。ところが、フランスの現代哲学には、ドイツ哲学よりもはるかにグノーシス主義に接近している思想傾向が存在する。この点で示唆的なのは、E・レヴィナスと M・アンリの現象学思想である。これまでの研究を通して徐々に判明してきたのは、レヴィナスとアンリの思想の根底には独特の二元論が控えており、それは古代グノーシス主義による救済論のパターンに酷似しているという実態である。レヴィナスとアンリは各々の仕方、若きヨナスが奉じたハイデガー哲学に影響を受けつつ、その存在論を批判的に乗り越えようとしたが、結果としてハイデガーよりもグノーシス的二元論の枠組みに適合した思想体系を構築するに至っている。国内外いずれにおいても、こうした方向での研究が十分に進んでいるとは言えないため、そこから生じた思想史理解の欠如を補う必要があると思われる。以上が本研究「グノーシス的二元論を基軸とした現代フランス哲学の再理解」の学術的背景である。

2. 研究の目的

(1) レヴィナスの現象学思想から取り出しうる二元論はいくつかの点でグノーシス的な二元論と呼応している。ここで想定されている主な参照文献は、戦前の諸論考から『実存から実存者へ』を経て『全体性と無限』までの時期を包括する前期レヴィナス思想である。レヴィナス思想における二元論と言えは通常、「同者」と「他者」の区別、「全体性」と「無限」の区別などが思い浮かぶが、それとは別に、主体の発生様式に関する二項対立的な枠組みがあることをテキストに即して提示し、それがグノーシス思想と繋がっていることを示すつもりである。

(2) アンリの現象学思想から取り出しうる「現象学的二元論」は多くの点でグノーシス的な二元論と呼応している。アンリ晩年のキリスト教三部作『我は真理なり』・『受肉』・『キリストの言葉』に準拠することで、かなり明

示的な形でアンリとグノーシス思想との交差・対決を跡付けることができる。この連関を慎重に解きほぐしながら、アンリ現象学とグノーシス主義における二元論の異同を明らかにする。

(3) 上に挙げたレヴィナスとアンリによる現象学思想がもつグノーシス的要素に着目しながらも、それらの特徴を比較的近い時期のフランスで活躍した他の思想家たち(S・ペトルマン、L・ラベルトニエール、S・ヴェイユ、G・バタイユ)による宗教二元論思想に対置しつつ、その異同を浮き彫りにする。

3. 研究の方法

(1) 哲学的・宗教的二元論に関するペトルマンの堅実な思想史研究『哲学史および宗教史における二元論』・『プラトン・グノーシス主義者・マニ教徒における二元論』を手がかりとして、まずは種々の二元論を構成している基本特徴を概括的に把握する。この作業を通して「グノーシス的二元論」の特異性を確認してゆくことになるが、その際にはすでに挙げたヨナスやフェーゲリンの著作だけでなく、K・ルドルフ『グノーシス』や荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』をはじめとする古典的なグノーシス研究をも参照しておく必要があるだろう。

(2) 以上の準備作業と並行しつつ、レヴィナス前期思想に特徴的な主体生成論の枠組みを取り出し、そこから浮かび上がってくる独特の二元論および救済論のグノーシス的性格にアプローチする。とりわけ『実存から実存者へ』・『時間と他者』から『全体性と無限』までの著作を含むレヴィナスの前期思想には、存在の物質性の「悪」から逃走することによって絶えず存在の彼方の「善」(これは「他者との関係」によって成就される)へ向かっているという点で、明確な一貫性がある。この運動の終結を『実存から実存者へ』のレヴィナスは「救済」と呼んでいた。ここには、悪の原理たる物質界からの救済を志向する古代グノーシス主義者たちの構想と大きく触れ合う部分がある。そこで注目すべきは、ただ単に「悪」と「善」、「存在」と「存在の彼方」といった典型的な二極だけでなく、むしろその背景に退いている個体生成様式の二元性である。その一つは「実詞化」による単独的主体(自己である「私」)の生成であり、もう一つは「繁殖性」による異他的主体(「子」=他者と化した私)の生成である。自己の存在に幽閉された孤独な「私」が、未知なる異邦的他者の到来を介して、「子」へと変化する過程には、グノーシス主義的といっても過言ではない特異な実存傾向が認められる。

(3) アンリによる「生の現象学」思想、中でも晩年のキリスト教三部作『われは真理なり』・『受肉』・『キリストの言葉』におけるグノーシス思想への接近と離反を取り上げ、その内実を詳細に検討する。主著『現出の本質』の中で現象の諸条件に関する検討を行ったアンリは、「超越」と「内在」を厳密に区別することで成立する「生の現象学」を構築してきた。しかも晩年のアンリは、自らの現象学思想を「現象学的二元論」の名のもとに総括しつつ、これをキリスト教の解釈に応用している。そこで強調されるのは、超越に対応して脱自的構造をもつ「世界」と、内在に対応して情感的構造をもつ「生」との鮮やかなコントラストであり、さらにはキリスト教における後者（「生」）の優越性である。数ある宗教テクストの中でも「ヨハネによる福音書」を重視し、なおかつ中世の神秘主義者マイスター・エックハルトの影響を受けたアンリの思想体系は、キリスト教神秘主義の二元論的構成そのものであり、このため古代グノーシス主義との関連もある程度まで予測しうるものであった。とはいえ、アンリが表立った形では古代キリスト教の教父たちに加勢して異端グノーシス思想を批判・攻撃しているために、事情はいっそう入り組んだものとなっている。アンリによる現象学的二元論がどの点でグノーシス的二元論に接近し、どの点でグノーシス的二元論から離れているのか、両思考の近さと遠さを正確に跡づける必要がある。

(4) ペトルマンとも思想的な関係を結んでいたバタイユおよびヴェイユの二元論に光を当て、それらの構成が、前年度までに明確化されたレヴィナスやアンリの異端的二元論と響きあうものであったことを示す。ヴェイユの二元論についてはすでに幾人かの論者（F・ド・リュシーやM・ナルク）がペトルマンと比較する形で論じている。これらの研究を足掛かりに、ヴェイユの場合は後期の宗教思想を中心としつつ、レヴィナスとの比較対照を試みる。

また、バタイユの二元論についてもD・オリエの決定的論考が残されている。とりわけ30年代から40年代にかけての論考群、および『宗教の理論』を中心に、カトリック的正統を大きく逸脱するような異端二元論構成を明るみに出しつつ、そのグノーシス主義的性格をレヴィナスやアンリの場合と比較する。

4. 研究成果

(1) 研究代表者が長期にわたって研究を進めてきたレヴィナスとアンリの現象学思想に潜むグノーシスの痕跡を炙り出すため、2013年度発表の論文「レヴィナス、アンリ、反宇宙的二元論」の続編として企図された発展的論考「En deçà du sujet. La question de

l'anonymat chez Levinas et Henry」を、現象学研究者のフランソワ＝ダヴィッド・セバー氏および川瀬雅也氏との特別シンポジウムの枠内でまず口頭（仏語）で発表し、その後にあらためてこれを邦訳した上で、論文「主体の手前　レヴィナスとアンリにおける無名性の問い」として発表した。この中では、「無名性」という概念をめぐるレヴィナスとアンリとの思想的差異のみならず、特に前期レヴィナスにおける存在一般の思考と、井筒俊彦の無分節概念、およびバタイユの内的経験論との連関についても分析しているが、こうした視点は従来あまり論じられてこなかったため、一定の学問的意義があると思われる。

(2) 哲学的思考の進展を振り返ると、多くの場合、二元論は一元論によって乗り越えられ、最終的には淘汰されてゆく運命にあった（プラトンに対するアリストテレス、デカルトに対するスピノザ、カント的アンチノミーに対するヘーゲル弁証法、等々）。この意味で二元論は圧倒的に「弱い」理論である。けれども、後から登場した総合的理論は多くの場合、かつて二元論が保持していた目新しさを失い、二項間の劇的な緊張関係を解消してしまっている。調停ないし統一を目指す大理論は、対立する二項の和解を成し遂げるために有意義なものではあるが、それは別の角度から見れば、対立の隠蔽でもあり、抽象への退行でもある。にもかかわらず、西洋哲学の分野において二元論はたいへい、不十分で欠陥をもった理論として、それゆえ何か乗り越えられるべきものとして語られてきた。しかしながら、そのような哲学的「常識」を一度疑ってみる必要があるのではないか。ペトルマンの詳細な二元論研究によって提示された、以上のような哲学的視点に基づいて、宗教・哲学的二元論の現代的提唱者としてアンリの思考を取り上げたのが、2015年に発表した論文「ミシェル・アンリの二元論とその実存的含意」である。この中では、アンリの理論構成と非常によく似た二元論を展開しているカトリック近代主義の哲学者L・ラベルトニエールとの関係や、異端であるマルキオン思想との予想外の接点を指摘するなど、新しい視点を提起することに成功した。この論考は、代表者によるこれまでのアンリ読解の成果を総括する研究となった。

(3) レヴィナスによるシモーヌ・ヴェイユ論（「聖書に抗するシモーヌ・ヴェイユ」）の翻訳および解題に従事する過程で、ヴェイユ特有のグノーシス的思考がもつ可能性を把握できただけでなく、レヴィナスによる二元論との明確な違いを確認することもできた。具体的な成果として、「レヴィナスのヴェイユ批判は正当か？」と題する学会発表を行った。そこでの発表要旨については、『宗教研究』第88巻別冊・第73回学術大会紀要号

[http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2015/03/vol_88.pdf] で読むことができる。本発表は、とくにレヴィナスがヴェイユの聖書読解に見られるある種の合理的価値観を危険視し、その背景にあるキリスト教プラトニズムが想定していた善悪二元論（純粹なる善である神と、力=権力としての悪）を批判している点に着目するものである。そこから少なくとも二つの学術的論点を引き出すことができるだろう。一つは、プラトン哲学の再理解という見地からこの問題全体（現代フランス思想におけるグノーシス的痕跡）を見直すことが今後の理論的発展につながるのではないかという示唆である。そうした見地に立つことで、たとえばシモーヌ・ペトルマンによるグノーシス理解の根底にあるような、宗教的プラトニズムの問題も重要な課題となってくるだろう。もう一つは、前項（2）の成果であるアンリ読解に関連して指摘しておいたマルキオン思想の重要性である。ヴェイユ思想の中には、正統派神学によって葬り去られたこの2世紀の異端者との明白な類似性が見られる。また、マルキオンに対しては、20世紀初頭から半ばにかけて、カミュやE・ブロッホ、G・シュテルンのようなヨーロッパ知識人の間で再評価の機運が生じていたが、この同時代性はヴェイユの二元論を考える上でも決定的な意味を与えているものと考えられる。

（4）レヴィナスとバタイユの関係については、2014年に発表の論文「実存の眩暈 バタイユのレヴィナス読解をめぐって」の中でも、これまで以上に突っ込んだ形で考察することができた。1947・48年の二度にわたって『クリティック』誌上で発表されたバタイユの手になる書評「実存主義から経済の優位へ」は、レヴィナスの『実存から実存者へ』を扱う書評論文であるが、上記の論文では、このバタイユの書評を導きの糸としながら、バタイユとレヴィナス両者の間に可能な対決の場を、存在やエロスの問題と絡めて設定したつもりである。そこで発見されたのは、バタイユがたとえば理性/情念といった伝統的二元論をある程度まで継承しつつも、宗教的次元においては伝統に逆らって、あるいはこの伝統以前に遡って、後者（情念）の側にこそ神的なものの聖性を割り当てているという点である。レヴィナスは論文「レヴィ=ブリュルと現代哲学」（『われわれのあいだで』所収）の中でレヴィ=ブリュルの人類学からこれと非常によく似た議論を汲み出している。おそらくこの点は、ヴェイユやペトルマンによる二元論とも密接に関わってくることが予想されるが、そのさらなる省察については今後の研究を通して深めてゆきたい。さらにまた、レヴィナスがバタイユとも関心を共有しているエロスというテーマ系に関しては、「E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題」という直近の論

文の中で、前期レヴィナスのグノーシス的傾向がその後のエロスないし「繁殖性」の議論を通じて緩和される（ないし補償される）という視点を打ち出すこととなった。これは、類似の傾向をもつH・ヨナスの世代論とも比較が可能であり、ユダヤ思想特有の問題として扱われるべきである。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計5件)

伊原木大祐、E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題、基盤教育センター紀要、査読無、第23号、2015年、15-30頁。<http://id.nii.ac.jp/1077/00000429/>

伊原木大祐、ミシェル・アンリの二元論とその実存的含意、基盤教育センター紀要、査読無、第21号、2015年、1-16頁。

伊原木大祐、実存の眩暈 バタイユのレヴィナス読解をめぐって、別冊水声通信 バタイユとその友たち（水声社）、査読無、2014年、324-340頁。

伊原木大祐、主体の手前 レヴィナスとアンリにおける無名性の問い、ミシェル・アンリ研究、査読無、第4号、2014年、97-118頁。

Daisuke Ibaragi、L'égotisme du besoin. L'analyse levinassienne de la vie、基盤教育センター紀要、査読無、第17号、2013年、1-22頁。

〔学会発表〕(計2件)

伊原木大祐、「レヴィナスのヴェイユ批判は正当か?」、日本宗教学会73回学術大会、2014年9月13日、同志社大学（京都府京都市）。

Daisuke Ibaragi、「En deçà du sujet. La question de l'anonymat chez Levinas et Henry」、日本ミシェル・アンリ哲学会特別シンポジウム「ミシェル・アンリとフランス現象学」、2013年9月28日、関西学院大学（兵庫県西宮市）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊原木 大祐 (IBARAGI, Daisuke)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：30511654

(2) 研究分担者

()

研究者番号：